

特集
Preconception Care
—健やかな母子となるための最新トピックス—

卵 巢(2)

Preconception care としての
子宮内膜症の取り扱い

北島 道夫

Summary

子宮内膜症は慢性炎症性疾患と捉えられ、思春期から閉経後まで女性の各ライフステージのヘルスケアに影響を与える lifelong disease である。本疾患は卵巣予備能に影響し、妊孕性低下のリスクとなる。Preconception care の観点から、妊孕性温存を念頭に置いた若年からの早期診断・介入が重要であるが、手術療法は卵巣機能を低下させる可能性もあるため工夫が必要である。また、子宮内膜症では周産期合併症のリスクが上昇することが知られている。

Key words

子宮内膜症
lifelong disease
慢性炎症
卵巣予備能
burn-out 仮説

はじめに
—子宮内膜症と preconception care—

Preconception care に定まった定義はないが、母子ともに健やかな妊娠・分娩を迎えるために妊娠前から男女が検査や体調管理、生活習慣の是正を行うことを指す¹⁾。最近では、晩婚化や初産年齢の上昇による高年妊娠の増加から、妊孕性低下あるいは周産期合併症を回避するために、preconception care として糖尿病などの慢性疾患や婦人科臓器の悪性腫瘍などを早期に発見し加療することは重要である。また、女性のヘルスケア、健康増進の観点から、preconception care は妊娠前のみにとどまらない、若い頃から女性自身の健康への意識向上と自己管理を促進し、疾病の早期予防につながる概念と考えられる。

子宮内膜症は、生殖年齢女性の約5~10%、不妊女性の約50%に認められる骨盤内の慢性炎症性疾患と捉えられる²⁾。内膜症病変の増殖・進展による骨盤内癒着、炎症性骨盤内環境あるいは卵巣機能低下により妊孕性に影響を与える。もともと生殖年齢の疾患であるイメージが強いが、最近では、若年・思春期から閉経期以降まで女性のさまざまなライフステージでのヘルスケアに影響する lifelong disease である認識が高まっている³⁾。本稿では、preconception care として子宮内膜症にどのように対応していくか、子宮内膜症が卵巣機能に与える影響について最近の知見を交えながら概説したい。

Michio Kitajima

長崎大学病院産婦人科准教授